

愛川町立愛川中学校

研究テーマ：「つなぐ・つながる」

1 実践の目的

本校では、学校課題の1つである生徒の「学力向上」を図るために、教師の授業改善、授業力向上を目指し、「つなぐ・つながる」を校内研究のテーマとして取り組んできた。学習指導要領で示されている「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けて、本校では5つの「つなぐ」ポイントを意識した授業づくりに向け、研究を進めてきた。

1. 生徒の知識がつながる授業
2. 授業の中で生徒同士がつながっていく授業
3. 授業と評価をつなげていく授業
4. 授業と家庭学習をつなげる授業
5. 学年・校種・教科間をつなげていく授業

上記のポイントを実現するために、本校では指導案の1ページ目に記載し、全職員が意識して取り組んできた。

2 実践の内容

学期ごとに研究授業の機会を設け（年間3回）、その都度事前研究、提案授業・授業参観、事後研究を重ねてきた。

- 第1回…2年生（数学科、国語科）
第2回…3年生（理科、社会科）
第3回…1年生（体育科、英語科）

(1) 生徒の知識がつながる/授業の中で生徒同士がつながっていく 授業

研究授業では、育成したい資質・能力を明確にし、言語活動を通して力を育成していくことを大事にしている。生きて働く「知識」を獲得するには、生徒自身が自在に活用できるようになることが大切であると考え、これまでに学習してきて獲得した知識と新しく獲得

した知識とを活用する場面を授業の中で意図的・計画的に設けるようにしてきた。



- ## (2) 授業と評価をつなげていく授業

学習評価を、教師の「授業改善」と生徒の「学習の調整」につながるものにするために、本校では授業の「見通し」と「評価規準」（評価の方針や単元や題材のまとまりの中での評価時期）を生徒と共有することに努めてきた。

【読み手の立場に立って詩を書く単元】学びのプラン		
	1. 知 識	参 考 資 料
【事前学習】	① 文中の読み込み → 「読み手」になり、読み手の立場から詩を書くことへ ② 目次や索引などによって、音楽生活の中心から題材を絞り、求めた材料を整理し、使いたいことを明確にする。(書く力) ③ 読み手の立場からして、歌詞の表現、表現の仕方などについて、文章を書く力を。(書く力) ④ 様々な表現方法を理解し、使うことができる。(知識・技能)	
【知識・技能】	① 音楽・美術・表現など(の) ② 主体的に学習に取り組む態度	
【学習の成果】	① 様々な表現方法を理解し、使っている。 ② 目的の表現に達している。 ③ 音楽生活の中心から、自分の思い、題材を決め、求めた材料を整理し、使いたいことを明確にする。 ④ 読み手の立場として、歌詞の表現の選択、表現の仕方などを明確め、文章を整えている。	① 音楽・美術・表現など(の)材料を求め、自分の思いによって、自ら表現を完成させる。 ② 音楽生活の中心から、自ら表現を完成させる。 ③ 音楽生活の中心から、自ら表現を完成させる。 ④ 音楽生活の中心から、自ら表現を完成させる。
【時間】	つづいた(1) 授業のなかから	【学習内容】
1	① 読み手の立場に立って、音楽生活の中心から、自分の思い、題材を決め、求めた材料を整理し、使いたいことを明確にしている。(イメージ)	○ 教科書の「音楽生活の中心から」 ○ 教科書「1冊の1冊」P12～15、P58～71
2		○ 本単元で学習した(1)の学習目標を確認する。

上記のような授業計画を生徒と共有することによって、生徒は学習に見通しをもち、また単元や題材の終末で、これまでの自身の学習の過程をより詳しく振り返ることができるようになった。

- (2) 授業と家庭学習/学年・校種・教科間をつなげていく授業

授業で学習する内容が、生徒自身の実生活の場面でどのように活用されるのかを実感させるために、学習内容とどのように「出合わせ

るか」等、学習課題の設定にも工夫して取り組んできた。



そうすることによって、今の生徒自身にとって「必要感」をもって学習に取り組めるようになってきたと感じる。

また、本校の指導案には単元や題材の目標を示すだけでなく、目標とする指導事項の小学校～中学校のつながりを示すようにしている。授業者は当該学年だけでなく校種間のつながりまでも意識するようになり、具体的な指導に生かすことができるようになる。さらに、本校の校内研にいられた小学校の先生方とも、指導事項を実現した子どもの姿のイメージを共有しながら、有意義な事後研究を行えるようになってきた。

そして、本校では教科の枠組を超えて一緒に授業作りをするので、他教科の学習内容や言語活動の経験等を参考に、総合的な学習の時間等の授業に生かすこともできる。例えば、本校では1年生で鎌倉に校外学習に行くが、鎌倉という土地の特徴について、社会科の「地域調査」の単元と重ねて指導している。さらに、校外学習の当日は実地調査を行い、社会の学習をさらに深めていた。校外学習の発表の場面においては、国語科の「話すこと・聞くこと」の単元と重ねて、プレゼンの授業を行った。生徒は自分たちのグループで設定したテーマに即して、内容を発表するだけでなく、そこで資料をより効果的に使うためにはどのようにすればよいか、など、国語の学習を生かしてプレゼン資料を作成している様子が見られた。

3 実践の成果

本校では教科の枠組みを超えた指導案検討を行っているので、日頃から互いの授業を見合う習慣ができています。例えば、自身の教科で見られる生徒の姿と他教科での姿を比べ、自身の授業での指導に生かしたり、他の授業者と学習の進め方等について話したりすることが日常的に行われている。職員のそういった日々の何気ないやりとりが個々の授業力を高める一助になっていると感じる。

また、今年度も横浜国立大学教育学部附属横浜中学校の先生方に講師として来ていただき、指導・講評・助言をいただき、授業について考えることができた。さらに、附属横浜中学校の授業を実際に見せていただく機会を設け、理論と実践の両方から授業改善を図ることができたと感じる。

4 今後の展開

(1) 生徒とともに作る授業

これまでと同様に事前・事後研究を行っていくことはもちろんのこと、「生徒インタビュー」を特に大切にしていきたい。授業者が工夫した授業を生徒はどのように受け止め、評価しているのかに耳を傾け、これからも不断の授業改善を行っていく。



(2) 資質・能力を育成する学習課題の設定

これまで「つなぐ・つながる」をテーマに授業改善を図ってきたが、次年度は生徒が主体的に課題解決を図り、その過程で資質・能力が育成される課題の設定をテーマとし、追究していきたい。